東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

2019年度 国語科実践報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉本,紀子, 西村,諭, 横田,哲, 山根,正博, 宇佐見,尚子, 影山,諒, 浅井,悦代 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/159271

国際中等教育研究　第13号　p.17 ～ 28
東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要

2019 年度　国語科実践報告

Practical Report of Japanese Language Division for 2019

国語科　杉本　紀子・西村　諭・横田　哲・山根　正博
宇佐見　尚子・影山　諒・浅井　悦代

１章　教科としての取り組み

１節　はじめに

新学習指導要領の公示を受け、本校では「国際バカロレア(以下、IB)の趣旨に基づくカリキュラム・マネジメント」の実践的研究を行っている。今年度もこの趣旨を踏まえた授業研究会を開催した。カリキュラム・マネジメントの中では、各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、教育内容を組織的に配列することが求められている。本校では、IB プログラムの導入により、すべての教科科目で共通の単元設計のイメージを持つことが、カリキュラム・マネジメントの土台となっている。今年度は「研究グループによる授業研究」を試行的に実施しており、授業研究会においては「国語科」と「理科」で教科横断的な視点を取り入れた授業を設計し、「国語科」と「技術科」では学際的単元（IDU）を設計して授業を行った。研究グループは、同一学年の授業をもつ異教科の教員で構成され、資質・能力等の共通性や固有性の視点から学習の転移を目指す単元開発や授業設計に取り組んでいる。この取り組みはまだ緒に就いたばかりではあるが、取り組んだことで組織的な取り組みの仕掛けの重要性が見えてきている。本稿では今年度の国語科としての実践を掲げるとともに、「いかに組織的な仕掛けを作るか」について国語科として取り組んだことを紹介する。

２節　2019 年度国語科実践記録（2019 年度 2 学期末現在）

国語科では毎年本紀要に当該年度の実践（1 学期までまたは 2 学期まで）を一覧として掲げてきた。本年も 2 学期末までの実践単元一覧表を後掲（図１～３）する。1 学年～4 学年までは MYP に基づくため、MYP において単元設計に必要とされている、Key concept（重要概念）、Global context、Statement of inquiry（探究テーマ）と使用教材を記載した。5 学年・6 学年においてもできるかぎり MYP の重要な要素を踏まえて単元設計を行っているため、一部の授業については探究テーマ等の記載を行っている。

図１＜1 年～2 年　実践単元一覧＞

学年		科目	単元	Key concept（重要概念）	Global context	Statement of inquiry（探究テーマ）	使用した教材とその著者（教科書教材には下線）（副教材・参考資料として使用したものも含む）
MYP対象学年	1（中1）	国語	言葉の機能を探る	つながり	個人的表現と文化的表現	言葉とは記号であり、発すると物事として実現する力がある。	谷川俊太郎「はる」・加藤周一「言葉とは何か」
			随筆の真髄にふれようー「字のない葉書き」ラジオドラム	創造性	アイデンティティーと関係性	創造性は、受け手にものの見方の広がりを与える。	向田邦子「字のない葉書き」（随想）
			語りには意図が含まれる	ものの見方	グローバル化と持続可能性	ものの見方は新たな視点と気づきを与え、視野広げていく。	小関智弘「ものづくりに生きる」（説明）
			漢字の成り立ち	文化	空間的時間的位置づけ	文字の成り立ちの背後には先人の工夫がある。	「漢字の成り立ち」
			言葉は「見ぬ世の人」との対話を可能にする	コミュニケーション	空間的時間的位置づけ	言葉は、発せられたその時間と空間を生きていた人の息遣いを伝えている。	「言葉の向こうに」（説明・評論） 『竹取物語』「姫の物語？翁の物語？」 『宇治拾遺物語』「とらわれた心に突き立つ矢」 「故事成語」（漢文）
			自由詩から短歌を作るー重要概念「システム」を考えるー	システム	個人的表現と文化的表現	自己表現はシステムによって影響され、意味の可能性を見出していく。	牟礼慶子「見えないだけ」 石川啄木歌集 楽しく学べる文法ノート
			登場人物の関係性をとらえよう	関係性	アイデンティティーと関係性	人はなぜ物語を語るのか。	少年の日の思い出」（小説）
	2（中2）	国語	言葉の力について考える	創造性・ものの見方	空間的時間的位置づけ 個人的表現と文化的表現	言葉は記録に意味や解釈を与える。私たちの記憶が記録によって呼び起こされるとき、そこには言葉による関連付けが働いている。	星野博美「昔話」（随想）・大江健三郎「吟味された言葉」（随想）
			魅力を伝える	創造性・ものの見方	アイデンティティーと関係性	言葉は文脈によって多様な意味を持つ。文脈はテキスト間の関連性だけでなく、空間や時間、対話の相手との関係、言葉が置かれた環境によって成り立っている。	活動「おいしさや魅力を表現しよう」（エッセイライティング）・教科書言語活動「魅力を伝えよう」
			文脈と論理をとらえる	論理	個人的表現と文化的表現	説得力のある主張や意見は、適切な命題とそれを支える根拠によって成り立っている。	なだいなだ「逃げることはほんとにひきょうか」（説明・評論）
			言葉の感覚を研ぎ澄ます―歌が持つリズムや形式の可能性と私たちが歌う意味を考えよう―	時間・空間・場所，文化，創造性	空間的時間的位置づけ 個人的表現と文化的表現	詩歌の持つ文化的・歴史的背景・特徴（特に韻律）や文脈は、空間や時間を経た受け手にも共有され、受け手の言葉遣いや表現にも影響する。	「短歌十五首」（詩歌）
			物語の仕組みと仕掛けをとらえよう	システム	空間的時間的位置づけ	物語の時間や空間の設定は読者と語り手の関係に影響する。	ポールフライシュマン「種をまく人」（小説）
			文化を定義しよう	文化	グローバル化と持続可能性	異文化を理解することは人間がその現象をどのようにとらえているのかという価値観を理解するということである。	河合雅雄「若者が文化を創造する」(評論)
			見ぬ世の人と対話しよう-歴史上の出来事、戦や人々の生死が物語として語られる意味を考えよう	時間、場所、空間 アイデンティティ	空間的時間的位置づけ アイデンティティと関係性	時間・場所・空間は物語を作る独自の言葉を生み出し、その言葉で語られる見ぬ世の人との対話は私たちの人生観や価値観を広げることができる。	「敦盛の最期」（平家物語）（古典）
			Fake-虚実を見抜く目を養う	ものの見方	個人的表現と文化的表現	説得力をもって人のものの見方や世界についての認識に影響を与えうる情報・テクストには、発信者側の文脈（目的や時に偏見）に基づいた編集が働いている。	教科書（情報と表現）「情報を読む・世界を編集する」・新聞記事（朝日・読売・東京・産経）他
			文法の役割を考える	システム	空間的時間的位置づけ	言語の構造（システム）は一定のルールによって働く。	文法(品詞・動詞の活用)
			表現するとはどういうことかを考える	創造性	個人的表現と文化的表現	二つの作品を比べることで、作者の表現の特徴や意図に迫ることができる。	太宰治「走れメロス」（小説）　シラー「人質」（詩）

図２＜3 年～4 年　実践単元一覧＞

学年		科目	単元	Key concept（重要概念）	Global context	Statement of inquiry（探究テーマ）	使用した教材とその著者（教科書教材には下線）（副教材・参考資料として使用したものも含む）
MYP対象学年	3（中3）	国語	「読書」について考える	コミュニケーション	アイデンティティーと関係性	読書をするということを通じて、自己や他者についての理解を深める。	新聞記事、岡本夏木「言葉の共有」（随想） 鷺沢萠「ケナリも花、サクラも花」（随想）
			効果的な表現を用いてリポート記事を書く	創造性	個人的表現と文化的表現	様々な記事に学び、表現を工夫しながら臨場感のあるリポート記事を書く。	雑誌記事、エッセイ集
			文学的文章を論理的に読む	ものの見方	個人的表現と文化的表現	文中の表現から心理描写を読み取り、主題を探る。	井上ひさし「握手」（小説）
			俳句を詠む	ものの見方	個人的表現と文化的表現	日常の中で習慣的に俳句を詠むことを通じて、季節の移ろいや身の周りにある変化に気づく。	「俳句十五句」（俳句）
			古典の中の季節を感じる	つながり	空間的時間的位置づけ	古典の中に描かれている季節の感じ方を知り、現在の我々の季節感に迫る。	「歌の源流へ――万葉集・古今和歌集・新古今和歌集」（古文）
	4（高1）	国語総合（現代文分野）	翔んでコネクト	つながり	アイデンティティーと関係性	文学は時代や国境を越えたつながりを生み出す	魯迅「野草」（小説） 夏目漱石「夢十夜」（小説）
			世界のレシピ	ものの見方	個人的表現と文化的表現	認識している「世界」は言葉による解釈が具現化したものである	鈴木孝夫「ものとことば」（評論） 佐藤信夫「コインは円形である」（評論） 新聞記事（各社の「出生数減少」に関する記事）
			次世代クリエイターに必要なもの	創造性	個人的表現と文化的表現	新時代の創造性は「言語で理解する知識」と「非言語的に理解する感情」を重ね合わせた時に生じる	四方田犬彦「『かわいい』現象」（評論） 山崎正和「水の東西」（評論） 「芝浜」（落語）　※古今亭志ん朝
			文学コミュニケーション	コミュニケーション	個人的表現と文化的表現	テクストの形式・ジャンルの違いによってコミュニケーションに質的な違いが生まれる	芥川龍之介「羅生門」（小説） 木下順二「夕鶴」（戯曲）
		国語総合（古典分野）	価値観の違いを捉える	時間、場所、空間	空間的時間的位置づけ	個人の価値観は、社会的文脈によって形成され、また社会的文脈を生み出す。	『宇治拾遺物語』「絵仏師良秀」
			故事成語の比喩を読み解く	文化	個人的表現と文化的表現	多種多様な故事が、成語や比喩表現となって、言語生活を豊かにしている。	『戦国策』「漁父の利」「狐虎の威を借る」
			随筆から何を読み取るか	ものの見方	個人的表現と文化的表現	「古人」は一括りにできるものでなく、一人ひとり個性を持った書き手である。	『徒然草』「静かに思へば」
			歌物語の構成	文化	グローバル化と持続可能性	和歌に着目し、物語の構成や特徴を捉えることができる。	『伊勢物語』「芥川」「筒井筒」『大和物語』「沖つ白波」
			史伝から人物像を考える	ものの見方	空間的時間的位置づけ	史伝から当時の人々の考え方や生き方を捉える。	『十八史略』「臥薪嘗胆」
			漢詩の多様性	創造性	個人的表現と文化的表現	何かを表現するためには内容だけでなく、形式や技法との関係が重要である。	漢詩「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」「春望」

図３＜5 年～6 年　実践単元一覧＞

学年		科目	単元	Key concept（重要概念）	Global context	Statement of inquiry（探究テーマ）	使用した教材とその著者（教科書教材には下線）（副教材・参考資料として使用したものも含む）
MYP対象外の学年	5（高2）	現代文B	世界とことば				長田弘「アイオワの玉葱」 村上陽一郎「文明のなかの科学」
			生きる意味について				中島敦　『山月記』 小浜逸郎「人生の物語性について」
			他者とともに生きるということ				夏目漱石「こころ」（小説） 加藤周一「文学の仕事」
			自分の中の常識を問う				鷲田清一「身体、この遠きもの」 前田英樹「絵画の二十世紀」 日高敏隆「生物の作る環境」
		古典B	構成に着目して説話を読み解く				「古今著門集」「沙石集」「宇治拾遺物語」
			時代背景と社会に対する見方の関わりについて考える				『方丈記』「安元の大火」
			語りの世界を分析し、表現する				『平家物語』
			思想と社会との関わりとは				「鼓腹撃壌」「知音」「推敲」「雑説」
		現代文B	日本の「空白」				谷崎潤一郎「陰翳礼讃」（評論） 原研哉「白」（評論） 芥川龍之介「手巾」（小説）
			日本の「近代」				森鷗外「舞姫」（小説）
			日本の「文学的美」				川端康成「日向」（小説） 川端康成「雨傘」（小説） 川端康成「美しい日本の私」（評論・講演） 川端康成「伊豆の踊子」（小説）
			日本の「今」				伊藤徹「『神々の永遠の争い』を生きる」（評論） 苅部直「『維新革命』への道」（評論）
		古典B	人間の思想と社会				『老子』『荘子』『韓非子』
			永遠の愛はあるか				『源氏物語』「桐壺」「若紫」・「長恨歌」
			語りの構造とその効果				『和泉式部日記』「夢よりもはかなき世の中」 杜甫「石壕吏」
			現実と非現実の境界				『雨月物語』「浅茅が宿」
MYP対象外の学年	6（高3）	古典A（古文）	古典文法や文学史や用語を整理してしっかり身につける	文化		現代とのつながりや現代とは異なる意味や用法を理解する。	古文文学史、源氏物語の人物関係、月の異名、方位、和歌の修辞法、文法知識
			文脈と人物関係を押さえ、余白をおぎなって読む	コミュニケーション		人物関係や心情を、表現と根拠づけてしっかり理解する。	『源氏物語』「桐壺」「夕顔」、『大鏡』「時平と道真」、『源氏物語玉の小櫛』
			演習問題で実戦力をつける	システム		相手の意図を理解し、表現を考えて適切な解答を作成する力をつける	センター試験予想問題集等
			交わす言葉				『源氏物語』「くれまどふ心の闇」
			人物関係を解きほぐす				『源氏物語』「かかやく日の宮」
			古典文学の多様な表現と主題を読み解く				『都のつと』・『伽婢子』・『琴後集』・『後鳥羽院御口伝』（センター試験予想問題）
		古典A（漢文）	漢文読解の基本知識を整理してしっかり身につける	文化		現代とのつながりや現代とは異なる意味や用法を理解する。	『史記』「陶朱公范蠡」「韓非子」「荘子」「老子」、「刎頸之交」、『陶淵明集』「五柳先生伝」
			漢文の文学史と人物について学び、状況をおさえて心情を読む	コミュニケーション		人物関係や心情を、表現と根拠づけてしっかり理解する。	唐宋八大家（王安石「傷仲永」、韓愈「与孟東野書」、柳宗元「鈷鉧潭記」）
			センター試験予想問題で実戦力をつける	システム		の意図を理解し、適切な解答を作成する力をつける	センター試験予想問題集等
		国語表現	対比を作る				ディスカッション・小論文
			展開に変化をつける				ディスカッション・小論文
			抽象的な説明と具体例				ディスカッション・小論文
			複数の文章の関係をつかむ				ディスカッション・小論文
			物語を作る				プレゼンテーション・ディスカッション・創作
			しゃべる技術（発表分析）				スピーチ動画分析・レポート
			ファシリテーショントレーニング				ファシリテーション実践・レポート グロービズ・吉田素文「ファシリテーションの教科書」

2 章　授業の実践

1 節　授業研究会　公開授業―理科（物理）との連携

今回授業研究会で授業を公開した授業者が所属する研究グループは、第 2 学年で「国語」「理科（物理）」「理科（生物）」「社会（歴史）」「家庭科」「英語」を担当している教員に養護教諭を加えた

7 名で構成されている。今年度当初に研究グループの話題として挙げられたのは、担当する教科・科目の授業において、本校の第 2 学年の生徒たちはどのような力を身につける段階にあるのかということであった。それぞれの年間計画やシラバスを概観し授業内容のねらいを共有・検討した上で、各教科で共通に言えることとして、以下の 3 点が重点として挙げられた。

本校第 2 学年の生徒は

① 抽象的な事象についての理解を深めるべき段階にある。

② 目には見えないものや仮定を理解し、広く想像できる力を持つべき段階にある。

③ 批判的に物事を見る眼を養い、疑問をもつ意識や主体的に事象や情報にアプローチする姿勢を強めるべき段階にある。

こうした見解を踏まえて今回の公開授業では特に②・③に焦点を当てた授業を設計・開講した。

単元設計にあたって、担当者同士の検討途上で最初に挙がったトピックは「フェイクニュース」であった。メディアリテラシー教育でもしばしば話題にされるトピックであり、アメリカ大統領選挙においても注目されるキーワードであったことは記憶に新しい。このトピックを授業で扱う際に多いのは「ファクトチェック」や「情報の信頼性や妥当性、中立性の確認」を中心とした観点であるように思う。確かに批判的思考スキルやメディアリテラシースキルの育成はそうした「適性な判断を下す情報受信者」としての力の育成でもある。しかしながら、現代における多様化したメディアを対象にする場合、生徒が用いているスキルは情報の受信者としてのスキルにとどまらないのではないか。

生徒は普段様々なメディアを通じて情報を得ていると同時に情報を評価し、発信している。情報の受信者である彼らはそれらの情報にどのようにアプローチし、どのような問いをもってそれらを吟味しているのだろうか。また情報を評価することで自分たちと世界（情報）との関わりを変容させることはないのだろうか。あるいは彼らが情報を発信することで彼らと世界との関わりが新たに構築されることはないのだろうか。

今回開講した授業の出発点はこうした問題意識にある。情報を精査することを含め自分と自分を取り囲む世界との関わりを批判的に思考するため、またその上で生徒たちが新たに世界との関わりを生み出していくためにはどのような仕組みが必要なのか―それを今回の実践を通して探ることとした。

授業のねらいは以下の通りである。

◆二つの教科に共通したねらい

□批判的なものの見方を身につけ、情報を適切に判断し選択する力を養う。

□できるかぎり公平な判断や思考に基づいて他者や社会と関わろうとする姿勢や意識を持つ。

◆個別の教科としてのねらい

＜国語＞

□自分たちをとりかこむ世界（情報）は、情報が持つ文脈・情報が形成する文脈に気づき、選別されたり切り取られたりした情報の外側を想像する力を身につける。

□メディアや情報に主体的にアプローチし、自分たちと世界の新しい関わりを生み出す力を身につける。

＜理科（物理）＞

□世界（情報）を批判的に見る視点として科学の視点を身につける。同時に、科学を無批判に肯定する危険性に気付く。

□メディアによって流布されている情報から、より正しいと思われる情報を選び取る力を身につける。

今回単元設計の段階で明確になったのは、設計段階でねらいと学習者像を共有すると、おのずと「ATL スキル」や「重要概念」、「グローバルな文脈」が共通のものなってくるということである。今回の授業では以下のように共通した ATL スキル/重要概念/グローバルな文脈を設定した。

・ATL スキル：リサーチスキル：メディアリテラシースキル
　　思考スキル：批判的思考スキル
・重要概念　：ものの見方・コミュニケーション
・グローバルな文脈：個人的表現と文化的表現

どのような学習者を想定し、身につけさせたい資質や能力を検討して設計することによって、二つの教科担当の間で無理やりなこじつけがなくとも IB の単元設計上の重要な要素が共有できるというのは新しい発見であった。

以下に当日の公開授業の概要を示す。

＜公開授業概要＞
2019 年度授業研究会
第 2 学年　国語
単元　Fake－虚実を見抜く目を養う
授業者　国語科　杉本　紀子
１．対象　　2 年 2 組　29 名
２．単元名　　Fake－虚実を見抜く目を養う
３．単元の目標
規準Ａ　分析
・同じトピックを扱った新聞記事を読み比べて、共通点や相違点を整理し、どのように情報が切り取られ、選択されているのかを調べよう。またそれがどのような文脈を形成しているのかを考えよう。
・自分たちの情報解釈を分析することで、自分たちの認識のバイアスを客観的に認知しよう。
・情報選択や文脈形成の背景にある意図やものの見方について探究しよう。
規準Ｂ　構成
・発信する側の持つ文脈と同時に、受け取る側にも読み取りの文脈があることを確認して自分で情報を再構築して記事を書き、同じトピックでも各自のものの見方の違いが文脈の違いに表れること、それが語彙の選択や表現形式の違いに表れることを体験的に認識しよう。
規準Ｄ　言語の使用
・発信者の文脈と受け手側の受容の仕方を考慮した語彙や表現の選択をしよう。
★学習指導要領の該当項目
〔知識・技能〕
（2）情報の扱い方に関する事項
第 2 学年
○情報と情報の関係

ア　意見と根拠，具体と抽象など情報と情報との関係について理解すること。
○情報の整理
　　イ　情報と情報との関係の様々な表し方を理解し使うこと。
　第３学年
　○情報の整理
　　イ　情報の信頼性の確かめ方を理解し使うこと。
〔思考・判断・表現〕
C 読むこと
　第２学年
　（１）
イ　目的に応じて複数の情報を整理しながら適切な情報を得たり，登場人物の言動の意味などについて考えたりして，内容を解釈すること。（精査・解釈）
エ　観点を明確にして文章を比較するなどし，文章の構成や論理の展開，表現の効果について考えること。（精査・解釈）

４．単元設定の理由－言説によって分断されゆく世界への危惧
　平成 29 年告示　中学校学習指導要領国語編　「2　国語科の改訂の趣旨及び要点（2）学習内容の改善・充実」では「②情報の扱い方に関する指導の改善・充実」として次のようにある。

急速に情報化が進展する社会において，様々な媒体の中から必要な情報を取り出したり，情報同士の関係を分かりやすく整理したり，発信したい情報を様々な手段で表現したりすることが求められている。一方，中央教育審議会答申において，「教科書の文章を読み解けていないとの調査結果もあるところであり，文章で表された情報を的確に理解し，自分の考えの形成に生かしていけるようにすることは喫緊の課題である。」と指摘されているところである。話や文章に含まれている情報を取り出して整理したり，その関係を捉えたりすることが，話や文章を正確に理解することにつながり，また，自分のもつ情報を整理して，その関係を分かりやすく明確にすることが，話や文章で適切に表現することにつながるため，このような情報の扱い方に関する「知識及び技能」は国語科において育成すべき重要な資質・能力の一つである。こうした資質・能力の育成に向け，「情報の扱い方に関する事項」を新設し，「情報と情報との関係」と「情報の整理」の二つの系統に整理して示した。

　上記の叙述に表れているように，高度情報化社会においては，いかに情報を「選択」し，「見極め」るか，あるいは膨大な情報を取捨選択して「整理」していくかというスキルが求められる。しかしながらなぜそうすることが必要であるのかを実感できなければ，「選択」「見極め」「整理」することは時に狭隘な視野につながる危険性もあろう。また，自分が発信者・表現者となって情報を扱っていく場合にはさらに「何のために発信するのか」「何のために表現するのか」という意思や目的を意識しなければならない。
　今回の授業は「メディア・リテラシー」・「批判的思考スキル」の育成を目指している。
　極端な言説が，グローバル化が進んだ世界，無数のネットワークで結ばれた世界を「分断」する方向に向かうという皮肉なパラドクスが現在の世界にはある。互いの言説を「フェイクニュース」だと主張し，ウェブを通して自分の主張を支援する情報を急速に収集し，自己の言説だけを正当化

するように悪意をもって情報をコントロールする人間が増えれば，平和な世界はより遠ざかる。国語科は「ことば」を中心的に扱う教科だからこそ，生徒にはわずかでもそのこと実感してほしいと考える。生徒には情報の受信者としても発信者としてもより平和な世界へと向かおうとする意識をもって，世界と自分との関係を構築してもらいたい。

５．単元の構成：計画時は５時間展開で想定したが、実際は８時間展開となり、３学期当初も同単元を継続して行った。

＜第１次＞

・メディアの種類と情報の質および信頼性をどのように自分が認識しているかを確認する。

・昨年度や１学期の学習を振り返りながら、情報の背後に発信者・表現者の意図や文脈があることを確認する。

第１時

・日常生活でどのようなメディアから情報を得ているかを確認する。

・自分たちがそれらの情報の何がどの程度「信頼できる」と考えているのかを振り返り確認する。またその理由を考える。

＊フェイクニュースやバイアスのかかった言説を例に、その真偽を普段どのように判断しているのかという点を話題として扱う。

＜第２次＞

・新聞記事を例に取り上げ意図や文脈の違いがどのような言語・非言語表現に表れているかを実際に分析する。

・メディアの種類が違うとどのような文脈の違いが表れるかをテレビニュースや SNS の記事を用いて分析する。

・分析結果を共有・発表する。

・発信する側の持つ文脈と同時に、受け取る側にも読み取りの文脈があることを確認する。

第２時（本時）

・同じトピックを扱った新聞記事を比べて読み、分析する。

　＊何がどのように違っているか。

　＊どの記事がどのような意図や文脈をもって書かれたものか。

＊どうしてそのように判断したのか。

＊写真やレイアウトなど、非言語的表現に込められた意図はどのようなものか。

第３時～第５時

・第２時で分析したことを共有し，各新聞が持つ「姿勢」について考える。

・同じトピックを扱った別のメディアの表現を分析する。

＊媒体や形式の選択はどのような意図に基づくか。

＊媒体の選択は受け手にどのように働く可能性があるか。

＜第３次＞

・自分で情報を再構築して記事を書いてみる。同じトピックでも各自のものの見方の違いが文脈の違いに表れること、それが語彙の選択や表現形式の違いに表れることを体験的に認識する。

第６時・第７時

・フェイクニュースが形成されていく過程について資料や映像から知識を得る。またそれに基づい

て考察する。
・いくつかの媒体から得た情報を自分で選択し，意図や目的に沿って再構築する。
活動：新聞記事を書く。
＊再構築した情報はどのような文脈を持っているか。
＊語彙や表現の選択はどのように文脈を形成しているか。
第８時
・各自が書いた記事を読みあい，評価する。

６．評価の観点　（MYP の観点については本校授業研究会の冊子内ユニットプランナーまたは後掲のルーブリックを参照のこと）
〔知識・技能〕
ア　同じトピックを扱った記事の表現の違いを読み取り，比較できている。
イ　同じトピックでも目的や意図によって，表現方法が違うことを理解し，目的や意図に沿った表現で情報を構築することができる。その際に，自分が持つ編集の傾向（バイアス）に気づくことができる。
〔思考・判断・表現〕
・読むこと
イ　同じトピックを扱った記事を比較することで，バイアスや編集意図に気づき，それを指摘することができる。また同時に，自分の読み取りの傾向（バイアス）にも気づくことができる。
エ　複数の記事を比べるための比較の焦点を設定できるか。また比較によって情報の背後にある文脈も比べることができるか。

７　本時の展開

時間	学習内容	指導上の留意事項
５分	１　探究テーマと本時の問いの確認 ＊前時の後半で新聞の読み比べのための資料を配布してある。本時までにどの記事を比べて読むかを決めてくるのが宿題となっている。 ○前時の振り返り ○自分が比較する２紙の記事の確認	○前時の振り返りに加えて，取り上げる４紙がどの程度今回のトピックを扱っているかをクイズにして問う。 ○トピックを扱う量が何を示すかを考えさせる。 ※答えは授業の最後で提示する。
２０分	２　読解・分析 ○２紙の記事を読み比べ，違いや気づいたことを書きだす。 ○比較の焦点をはっきりさせる。 見出し 写真 同じ出来事をどう述べているか 同じ語句をそれぞれどのような文脈で	○新聞の全面（コピー）を黒板に掲示する。前に見に来てもよいと指示する。 ○違いの背後にあるものを意識して読み取るように指示をする。 ○見出しや文章だけでなく，写真や記事の位置を考慮に入れている生徒がいるかを確認する。 ○比較対象となる２紙をこちらであえて設定

	使っているか	することはしない。イデオロギーの違いを最初から情報として提供するようなことはせず，そうしたバイアスがかからない状態で記事の内容や表現に向き合わせる。
１０分	３　共有 〇比較から気づいたことを共有し合う。班または隣席の生徒同士で共有する。 〇他者の気づきや意見で納得できるものがあれば，メモを取り，自分の分析に生かす	〇違いの背後にあるものが何だと感じるかについても共有するよう指示をする。
１０分	４　発表・共有 〇比較の焦点が同じ生徒または同じ２紙を選んで比較した生徒がそれぞれ発表する。 〇比較の対象が同じでも，分析の視点や読み取りが違うことに気付く。	（〇次時に向けて別の情報を提供する。 ※クイズの答え・新聞の意見広告（朝日新聞掲載「Patagonia」の広告 これらはそれぞれの新聞の読者にどのような影響を与えるかを次時に考える。） ★当日は別情報の提供に至らなかった。

２節　単元を通じて見えた生徒の理解

最も大きかったのは、事実を書いていると思っていた新聞などのマスメディアも「編集意図」を持って記事を書いており、同じ出来事でも伝え方が違うということが起こっていること、それを「事実」と呼んでよいのかについて生徒が疑問を持ったことであった。複数の生徒が学びの確認シートの疑問の欄に「事実とは何なのか」「本当に客観的な事実は存在しないのではないか」と記入していたことからそれを見取ることができた。

さらに、第２次の終わりに課した学期末レポートに見られた生徒の記述として「読み手」が記事の文脈形成にかかわっているという指摘がある。生徒は記事の持つ文脈は書き手だけでなく読み手が形成するものでもあると判断していた。それは第３次のフェイクニュースの形成過程を理解するためのカギであり、第２次でそうした「批判的思考」が一定数の生徒に身についていたことは授業の大きな成果であると言える。

３節　「仕掛け」の重要性

今年度の実践を通してその重要性をあらためて認識したのは、授業設計においていかなる「仕掛け」を単元に組み込むかという点である。今回の単元において授業者が組み込んだ仕掛けは「受信者」としてのみメディアに向かうのではなく、「発信者」として表現する活動を通して、「事実」を選択することの重要性に気づかせるという仕掛けである。生徒は通常メディアリテラシーの学習において、受信者として「いかにだまされないか」「いかにまどわされないか」に重点をおいた見方をすることが多い。しかしながら現代における「受信者」はそのまま二次的な「発信者」になる可能性が大きい。その際に意図せずともフェイクニュースや誤報の発信者になる危険性もある。また自

分のものの見方がいかにバイアスがかかったものであるのかを知ることで、人間のものの見方がいかに多様なものであるかを認識することもできるだろう。他者の発信する情報を単純に疑うことがメディアリテラシーなのではない。自分もまた意図や文脈やバイアスをもった受信者兼発信者であることを理解し、情報に向き合う自分自身をメタに認知することこそメディアリテラシーと呼ぶべきだろう。

今回の単元に続く単元として授業者は、ジョー・オダネルの撮った「焼き場に立つ少年」の写真を題材に、「記録と事実と人生」の関係を探究する単元を実践している。この単元では今回の「Fake」の単元そのものを仕掛けとして用い、「事実や真実とはいったい何なのか、我々はなぜ真実を探し求めるのか」をテーマとして設計している。この問が成立するのは、前の単元で生徒が事実のあり方や選択された事実に疑問を持つような探究ができたからであろうと考えている。

付録：「Fake-虚実を見抜く目を養う」単元ルーブリック

国語			Fake−虚実を見抜く目を養う 単元評価規準			
	Criterion A Analysing 分析		Criterion B Organizing 構成		Criterion D Using Lanugage 言語の使用	
Achievement Level	第2学年 生徒は	今回の単元では・・・	第2学年 生徒は	今回の単元では・・・	第2学年 生徒は	今回の単元では・・・
1 to 2	i. 内容、文脈、言語、構造、技法、およびスタイル（文体）について 最小限の特定や説明をするが、テクスト間の関係性を説明しない ii. 作者の選択が受け手に与える効果について最小限の特定と説明をする iii. 例や説明を用いて意見や考えの理由を述べることはまれにしかない。用語をほとんど／全く用いない iv. ジャンルやテクスト内、および複数のジャンルやテクスト間で特徴の類似点と相違点を解釈することはまれにしかない	新聞記事の比較・分析を行っているが、比較の焦点がぼんやりしているか、ずれている。語句や表現の違いのレベルに気づきがとどまっている。	i. 組織的構造の使用は最小限で、それが常に文脈と意図に適しているわけではない ii. 意見や考えを、最小限の一貫性と論理で整理する iii. 執筆のフォーマットを最小限利用し、それが必ずしも文脈と意図に適した体裁を作成しているわけではない	情報が羅列的であるか、文脈や方向性を構築できていない。	i. 適切な語彙および表現形式を限定的な範囲で使用する ii. 文脈と意図に応じていない、不適切な言語使用域（レジスター）とスタイル（文体）で書き、話す iii. 文法、統語法、句読法の正確な使用が限定的である。誤用によってしばしばコミュニケーションが妨げられる iv. 綴り、書き、発音する場合の正確さが限定的である。誤用によってしばしばコミュニケーションが妨げられる v. 非言語的コミュニケーション技法の利用が限定的または不適切である	意図や目的に応じた語彙が使われていない。文法的な事柄を含めて過誤が複数見られる。
Achievement Level	第2学年 生徒は	今回の単元では・・・	第2学年 生徒は	今回の単元では・・・	第2学年 生徒は	今回の単元では・・・
3 to 4	i. 内容、文脈、言語、構造、技法、およびスタイル（文体）に関する特定や説明をまずまず行い、またテクスト間の関係をある程度説明する ii. 作者の選択が受け手に与える効果についてまずまずの特定や説明を行う iii. 一貫性はないものの、いくつかの例や説明を用いて意見や考えの理由を述べる。いくつかの用語を用いる iv. ジャンルやテクスト内、および複数のジャンルやテクスト間で特徴の類似点と相違点をある程度解釈する	新聞記事の比較・分析を比較の焦点を自分なりに設定して行える。語句や表現の違いに気づくことができている。比較によって記事や各メディアが持つ傾向に気づいている。	i. 文脈と意図に役立つ組織的構造を適切に利用する ii. 意見や考えを、ある程度の一貫性と論理で整理する iii. 執筆のフォーマットを適切に利用して、文脈と意図に適した体裁を作成する	比較分析したことを踏まえて、伝達したい情報が伝わるように情報を順序良く構成できている。	i. 適切な語彙、構文、表現形式をまずまずの範囲で使用する ii. 時々、文脈と意図に応じた言語使用域（レジスター）とスタイル（文体）で書き、話す iii. 文法、統語法、句読法をある程度正確に用いる。誤用によって時々コミュニケーションが妨げられる iv. ある程度正確に綴り、書き、発音する。誤用によって時々コミュニケーションが妨げられる v. 適切な非言語的コミュニケーション技法をある程度利用する	意図や目的に応じて、間違いのないよう語彙・表現を選択できている。見出しや記事に使われている語彙に大きな過誤がない。
Achievement Level	第2学年 生徒は	今回の単元では・・・	第2学年 生徒は	今回の単元では・・・	第2学年 生徒は	今回の単元では・・・
5 to 6	i. 内容、文脈、言語、構造、技法、およびスタイル（文体）について内容のある特定と説明を行い、またテクスト間の関係について説明する ii. 作者の選択が受け手に与える効果について関して内容のある特定と説明を行う iii. 例や説明を用いて意見や考えを十分に正当化する。正確な用語を用いる iv. ジャンルやテクスト内、および複数のジャンルやテクスト間で特徴の類似点と相違点を適切に解釈する	新聞記事の比較・分析を比較の焦点を適切に設定して行える。語句や表現に気を配って記事を正確に読み取れている。比較によって記事や各メディアが持つ文脈に気づいている。	i. 文脈と意図に応じた組織的構造を適切に利用する ii. 互いの考えを踏まえながら、意見や考えを一貫性のある論理的な方法で整理する iii. 執筆のフォーマットを適切に利用して、文脈と意図に適した体裁を作成する	比較分析したことを踏まえて、自分の意図や文脈を意識して情報を順序良く構成できている。	i. 適切な語彙、構文、表現形式を多様な範囲で適切に使用する ii. 文脈と意図に応じた言語使用域（レジスター）とスタイル（文体）で、適切に書き、話す iii. 文法、統語法、句読法をかなりの程度正確に用いる。誤用によってコミュニケーションが妨げられることはない iv. かなりの程度正確に綴り、書き、発音する。誤用によってコミュニケーションが妨げられることはない v. 適切な非言語的コミュニケーション技法を十分に利用する	意図や目的に応じた語彙・表現を、集めた情報から適切に選択できている。見出しや記事に使う表現を意図にあったものにしようとする姿勢がある。
Achievement Level	第2学年 生徒は	今回の単元では・・・	第2学年 生徒は	今回の単元では・・・	第2学年 生徒は	今回の単元では・・・
7 to 8	i. 内容、文脈、言語、構造、技法、およびスタイル（文体）について鋭い特定と説明を行い、またテクストの間の関係を十分に説明する ii. 作者の選択が受け手に与える効果に関して鋭い特定と説明を行う iii. 広範な例や説明を用いて意見や考えの理由を詳細に説明する。正確な用語を用いる iv. ジャンルやテクスト内、および複数のジャンルやテクスト間で特徴の類似点と相違点を鋭く比較・対比する	新聞記事の比較・分析を比較の焦点を独自の視点を活かして明確に設定して行える。語句や表現、また非言語表現までを含めて細かな点まで気を配って記事を正確に読み取れている。比較によって記事や各メディアが持つ文脈を見きわめ、適切に説明できている。	i. 文脈と意図に効果的に応じた組織的構造を、高度な方法で利用する ii. 互いの考えを高度に踏まえながら、意見や考えを一貫性のある論理的な方法で効果的に整理する iii. 執筆のフォーマットを優れた方法で利用して、効果的な体裁を作成する	比較分析したことを踏まえて、自分の意図や文脈を意識して情報を精査し、効果的に構成できている。	i. 適切な語彙、構文、表現形式をさまざまな範囲で効果的に使用する ii. 文脈と意図に応じた、常に適切な言語使用域（レジスター）とスタイル（文体）で書き、話す iii. 文法、統語法、句読法を高度な正確さで用いる。誤用が少なく、コミュニケーションは効果的である iv. 高度な正確さで綴り、書き、発音する。誤用が少なく、コミュニケーションは効果的である v. 適切な非言語的コミュニケーション技法を効果的に利用する	意図や目的に応じた語彙・表現を、自分で選択できている。見出しや記事に使う表現を精査している。

Japanese Language Division Bulletin

Abstract

Subject: Practical Report of Japanese Language Division for 2019

Summary: This year, too, the Japanese Language Division has drawn up and practiced unit design, focused mainly on a concept for each grade, as shown in the table. In the MYP, we give lessons through sharing with students the key concept(s), related concept(s), global context, and investigative questions based thereon. Since the unit is designed on the principle of concept-based unit design, even for lessons for fifth- and sixth-year students after completion of DP and MYP, students learning at our school develop the diverse qualities and abilities represented by ATL skills through concept-based learning of the Japanese Language over six years. These concept-based unit designs are effective through coordination with other class subjects. In this lesson demonstration session, unit designs coordinated with IDU and among class subjects were drawn up for Japanese Language and Technology for first-year students, and for Japanese Language and Science (Physics) for second-year students. It is believed that sharing the concept and ATL we aim for, made students broaden their learning and deepen their understanding of the concept.